

## 香川大学教育学部

## 附属教育実践総合センターニュース

No. 29

平成21年3月31日発行

## 目次

特集 第9回学部・附属学校園		センター研究会報告	10
教員合同研究集会を終えて	1~2	フレンドシップ事業報告	11
発表研究グループ報告	2~4	センター協議会報告	12
平成20年度初等教育研究発表会報告	5	教育実践集中講座実践報告	13
第92回附属坂出小学校教育研究発表会報告	6	センター活動報告・お知らせ・寄贈図書	14~15
第54回附属幼稚園研究発表会報告	7	教育実践総合研究第19号原稿募集	16
センター公開講演会報告	8~9		

## 特集 第9回学部・附属学校園教員合同研究集会を終えて

—学部と附属学校園との協働による開発研究—

教育学部副学部長 中塚 勝俊

第9回学部・附属学校園教員合同研究集会は、2月27日の午後、学部および附属学校園合わせて166名の教員（学部71名、附属学校園95名）が出席して、教育学部415講義室を主な会場として開催されました。

今回は、「香川大学教育学部・附属学校園共同研究機構」が立ち上がって、2年目の企画となりました。昨年は、「・・・共同研究」というテーマにコンセプトを置いたのですが、今年は、学部・附属の絆をさらに深める意味をも込めて「協働」といたしました。



今年度も5件のプロジェクト研究が精力的に進められたのですが、発表報告会は時間的制約もあり昨年と同様ポスターセッションと全体発表という形式を採らざるを得ませんでした。来年度以降、すべての教員が研究の成果を共有するための工夫が図らなければならないように思います。

3件のポスター発表のすべてを聞くことはできませんでしたが、

私は「小学校国語科におけるクリティカル・リーディングの実践的研究」の発表に参加しました。学部の山本先生と高松小学校の山村先生との共同研究の成果の一端が提案され、新学習指導要領に沿った国語科の授業の実践が発表され興味深いものでした。というのは「創作活動は、これまで読むことが中心であった文学を書く側から見つめなおし、表現技法の巧みさや、構成の素晴らしさを学ぶことができる単元として扱われている」という指摘を発表資料に見たからです。あるいは、山本先生の「作家の立場に立ってみると読みが深まる」という言に、私の今までかかわってきた領域と相通じるものがあったからです。まさに「他人の視点に立つ」という立場は、ソーシャル・スキル（相手の身になって思いやる）と同じ、と自分で合点していました。

会場からの質問の中に、帰納主義的教授法と演繹主義的教授法をめぐって議論が展開し始めようとする雰囲気は、何とも興味をくすぶる展開でしたが、時間的制約のため終わりを余儀なくされ惜しい場面でありました。国語科という教科にもそのような課題があることが分かり、しばし楽しめました。

ポスターセッション終了後、会場を 415 講義室に移し、学部長の挨拶で後半部が始まりました。教育をめぐる社会意識の変化、附属の存在意義、学部が取り組んでいること、そして附属学校園の将来について話されました。とりわけ高松・坂出の 2 地区の附属の将来について、信頼関係を醸成しながらゆっくり温めながら考えていくという内容には、春の息吹が強く濃く流れているように思います。

続いて、七條先生の司会進行により「教育実習及び教育実習事前事後指導カリキュラムの開発研究」、「教育実習生のパフォーマンスを評価する評価観点の開発研究」の 2 件が発表されました。前者は、特別支援研究室と附属特別支援学校との連携の下、教育実習の効果をあげた試みであり、かつ事後指導を平成 22 年度学生から導入される「教職実践演習」にリンクするねらいの報告でした。後者は、教育実習中に習得しなければならない内容について、教育実習生による自己評価、指導教員による実習生評価、それぞれの項目（60項目）の習得時期について調査し、それぞれの評価者の差異について検討し、実習での指導に結びつく「評価」の開発を工夫すると同時に、教育実習前、中、後のそれぞれの時期において指導重点項目をどのように配意していくかという方向性がうかがえる報告でありました。

教育実習は、学部や附属が多少の問題をはらみながらも工夫が重ねられ改善が醸し続けなければならない教育学部にとっては最も大事な教育内容であります。その点では、教育実習の将来に対して新しい切り口を提供していただいた研究であったと思います。教育実習の自己点検評価に基づいた「教育実習評価基準の明確化、評価項目の見直し、教育実習評価の客観性」に深く関係するという点で意義があったように思います。

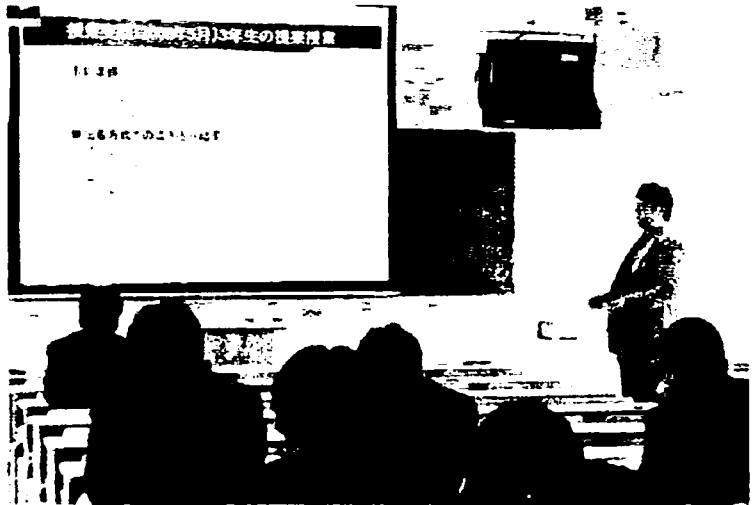
### 発表研究グループ報告

#### 電子掲示板及び電子メールを用いた情報モラルと情報スキルに関する実践教育研究

技術教育 黒田 勉

本研究は、香川大学附属高松小学校で行われている総合的な学習と道徳・特別活動の学習のうち、情報リテラシー教育に充てられた学習活動の授業実践について行われたプロジェクトである。昨年度より授業に使用できる Wiki による Web ページの掲示板機能を利用し、児童の行った書き込みを基に教材を作成し、授業を進めていったものである。2009年2月に行われた研究授業に向け、情報モラル教育、情報スキル教育の在り方を検討した。

今回の報告では、本プロジェクトで行った授業の内容と、分科会における討論の概要を説明した後、実際に授業をされた教員からの補足を行った。質疑応答では、附属中学校の教員から、本プロジェクトに寄せる期待の声もある中、児童の持つ情報モラル、情報スキルのレベルの個人的なばらつきを以下に抑えるかということについて、活発な討論が行われた。



今後、本プロジェクトの実践事例を基に、公立学校の「お手本」となりうる授業の在り方を検討していく予定である。

#### 小学校国語科におけるクリティカル・リーディングの実践的研究 附属教員との共同研究を終えて

国語教育 山本 茂喜

私と山村勝哉教諭（附属高松小学校）は、「小学校国語科におけるクリティカル・リーディングの実践的研究」というテーマで共同研究を行った。

新指導要領も告示され、国語科教育においては、ますますクリティカル・リーディングの重要性が高まっている。小学校段階においても、その基礎的な能力を身につけることが必要とされている。

このような問題意識から、ストーリーマップという新たな方法を、物語の読みと創作に用いることにより、物語の基本構造を習得し、クリティカル・リーディングに活用することを目的に共同研究を行った。

昨年を引き続いてのプロジェクト研究ということもあり、附属高松小学校の研究会という実践研究の場を核とすることによって、スムーズな共同研究の体制を築くことができたように思う。

今回の共同研究にご協力頂いた方々、また研究集会当日、多数の貴重なご意見・ご質問をいただいた先生方に深く感謝申し上げます。

#### 学部教員と附属小教員の連携による教員養成プログラムの開発研究 附属学校と連携した Action Learning プログラムの開発

保健体育 野崎 武司

体育では、大学院生の教員養成プログラムに、附属学校教員と連携して一単元の授業を遂行するという活動を行っている。大学教員がサポートチームとして関わり、組織的観察法などを駆使して、授業実践の省察を繰り返すという実践的な教育研究の中で、大学院生の学びを明確にしていこうとする試み（Action Learnig プログラム）である。

今回は、野崎の学内での模擬授業の授業実践と比較し、この Action Learnig プログラムの有効性を以下のように示した。



(1) 運動文化の体系性・系統性と、子どもの運動学習の事実(実態)の両者に配慮しながら、学習内容を切り出して、子どもと共に必然性のある学びを産み出すような授業技術は、極めて高度なものであり、実際の小学生の1単元の授業実践の継続が有効に働いていること。

(2) 1単元の授業という限られた状況ではありながら、1大学院生に対して附属教員・大学教員などからなるサポートチームが組織的に支援しながら、大学院生の課題遂行に関わること(学部の模擬授業では大学教員が1名もしくは複数名)。

### 教育実習及び教育実習事前事後カリキュラムの開発研究

教育実習改善のための取り組みとその展望

特別支援教育 小方 朋子

附属特別支援学校 木下 博美

本研究は附属特別支援学校における教育実習において、教師としての資質・能力、特に実践力を身につけるために、実習プログラムの検討や実践を行い、今後の教育実習の在り方を検討した。平成18年度より実習生にアンケートをとり、実習中の困難さがどこにあるのかを把握してきた。実習生が困難だと感じる点こそが指導者としてのニーズであるという認識から、今年度はもっとも困難を感じている指導案作成の指導を改善した。教育実習の直前に学部の教員による演習を行ったり、示範授業の指導案を穴あきにして、実際に見た授業の中で教員がどういう意図を持って動いていたのかを実習生に考えながら参観をさせたりした。「障害児教育指導論」における中間指導も含め今年度の試みは成果を上げることができたが、今後の課題は、さらに学生らが実践力をつけるためには、より教育現場を意識し、具体的にポイントを絞った演習や教育体験を実習後にどう組むかになると考えられる。そのためにも学部が「教職実践演習(仮)」をどのように構想するかが重要である。

### 教育実習生のパフォーマンスを評価する評価観点の開発研究

数学教育講座 長谷川 順一

本研究は、教育実習生の指導に資する評価を開発することを目標とするものである。今年度は、そのための基礎資料を得ることを目的とし、附属高松小学校で教育実習を行った3年次主免教育実習生及び附属高松小学校教員を対象として、教育実習の遂行に要する60の項目について、5回の調査を実施した。調査結果の概要については研究集会当日に配付された資料を参照していただきたいが、今後は、調査から得られた結果などをもとに、実習生の自己評価や指導教員による実習生の指導の際に利用・活用し得る評価シートを作成する予定である。なお、同一の調査を行っても、対象者数が多ければより詳細な情報が得られるであろうし、校種などが異なればまた異なった傾向もみられるであろう。そのような検討もまた興味深いところである。様々な検討をもとに、早急なる教育実習の充実強化策の実現が望まれる。

附属幼稚園高松園舎・附属高松小学校「初等教育研究発表会」が開催されました

附属高松小学校長・附属幼稚園高松園舎主事 長谷川 順一

去る2月5・6日に開催されました附属幼稚園高松園舎・附属高松小学校の初等教育研究発表会では、多くの参会者を得て盛会裡に終えることができましたことに心より御礼申し上げます。高松園舎では、「協同・共感」をキーワードとして実践と検討・研究を重ねて参りました。高松小学校では、新学習指導要領にいう「習得・活用・探究」の内、特に「活用」に焦点を当て授業研究を行って参りました。さらに園舎と小学校は、幼小連携に関する研究事業の指定を受け、幼小の接続について検討して参りました。本発表会では、それらの研究の成果を保育や授業の公開などを通して報告・発表し提案いたしました。また、高松園舎では篠原孝子先生(国立教育政策研究所)に、高松小学校では田中耕治先生(京都大学大学院)に、それぞれご講演をいただき、教育の今日的課題や今後への展望についてご教示いただきました。本発表会を契機の一つとして、幼稚園や小学校での教育研究がさらに進展すればと願っています。指導助言者として参加いただきました先生方、授業を参観していただきました先生方、そして様々にご指導ご支援をいただきました皆様方に、重ねて感謝を申し上げます。また今後とも一層のご支援を賜りますよう、お願いいたします。



かどの形を調べる  
(2年生・算数)

園児と1年生が一緒に活動  
(幼小連携)



第92回 附属坂出小学校教育研究発表会

香川大学教育学部附属坂出小学校

1月29日・30日に第92回教育研究発表会を開催いたしました。本年度から初めて冬期開催としたことで、様々な不安や戸惑いがありましたが、県内外から1,100名を超える参加者をお迎えし、盛会裏に終えることができました。

今年度は、研究主題を『「思考力」をはぐくむ学びの創造 -脳神経科学との連携から新しい時代の学びにせまる-』と掲げ、「思考様式（思考に関する手続き的な知識）を習得・活用する授業づくり」「附坂小型時程の確立をドリル教材の充実」という2点について、提案しました。

「思考様式を習得・活用する授業づくり」では、これまで、十分に意識せずに用いられることが多かった「思考様式」を子ども自身が自覚し、必要ならば修正するというメタ認知的な活動を取り入れた授業を展開しました。さらに、4月から始まる移行期間を見据え、新学習指導要領で新しく示された内容を教材化することにも取り組みました。「研究理論を分かりやすく具現化する授業ができています。」「新しい教材開発には魅力を感じた。」等、参会された先生方からは高い評価をいただきました。



【体育館での全体授業】

「附坂小型時程の確立をドリル教材の充実」では、これまで試案レベルであった「附坂小型時程（朝5分間の計算ドリルで脳を活性化し、活性が低下し始める4時間目前に2分間の音読をする時程）」の効果を検証した過程や結果を示しました。また、音読や計算以外に、教科内容に寄り添って開発したドリル教材も提案し、実際に子どもたちが取り組む様子も見ていただきました。研究会当日のみならず終了後にも、販売の有無に関する問い合わせを多方面からいただき、反響の高さに驚きつつ、多くの学校で利用していただける方法を検討しております。

2日目午後には、「新学習指導要領と思考力の育成」という演題で、梶田叡一先生（兵庫教育大学学長）の講演会が行われ、学習指導要領の最前線からの話題等をお話しいただき、参加された先生方は熱心に耳を傾けていました。

今後も、思考力育成に関する研究は継続する予定です。そして「研究理論を具体的な実践で示す」という附属坂出小学校の良き伝統を守りつつ、研究を進め、子どもたちのよりよい学びの在り方を探っていきたいと思っています。

教育研究発表会に際してのご指導、ご協力に対して深く感謝申し上げます。



【梶田叡一先生による講演】

## 第54回附属幼稚園研究発表会報告

## 1 研究会の概要

期日 平成20年10月31日(金) 9:00~16:10  
 内容 公開保育、年齢別分科会、全体会(開会式と研究経過報告等)  
 講演 「伝え合い・育ち合い」 東京成徳大学子ども学部教授 神長 美津子 氏  
 参加者 県内外より250名程度

## 2 研究主題とその解説

研究主題 「子どもの育ちを支える」～伝え合う喜びを実感できる環境・援助を探る～

昨年度からの、3・4・5歳児それぞれの保育を見直し丁寧に子どもたちの育ちを見取る実践をもとに、個々の教師がそれぞれの課題意識で書いた事例を教師集団で読み合うことを積み重ねた。その中で、子どもたちが自分らしさを出すようになったり生き生きと友だちとかかわる中で自己発揮していたり、子どもと教師、子どもたち同士が伝え合い認め合いながら遊び・生活を進めたりする姿に大きな魅力を感じた。そしてその姿を「それぞれの時期に応じて子どもたちが伝え合う喜びを実感する経験を積み重ねている姿」なのではないかと考え、事例研究を通してより詳しく分析していくとともに、それを支える環境や援助についても検討していった。

## 3 今年度の研究内容と成果

子どもたちには、それぞれの発達段階、個や集団の育ちにより、その時その時の「伝え合う喜びの実感」があり、それを積み重ねることが次の育ちにもつながると感じた。実践の中から見出した、伝え合う喜びを実感できる環境とは「安心して自分を出せる」「主体的にしたいことに取り組める」「存分に自己発揮できる」「思いや考えを共有できる」「友だちを受け入れる」「互いを認め合いやすい」などの環境である。そのために教師は「子どもの思いや表現をしっかりと受け止める」「子どもたちが自分のイメージや思いが伝わる嬉しさや友だちのよさを感じられるよう支える」「子どもたちが友だちとイメージや考えを伝え合い工夫・協力する楽しさや充実感を味わえるよう支える」など、それぞれの時期にふさわしいかわりをしながら充実した保育内容を展開することが大切である。

## 4 今後の研究課題

個々の教師の資質向上と同時に、園全体でよりよい環境構成・援助を行う大切さを考え、教師同士も「伝え合う喜び」を実感できるほど密に連携を取り合う関係性を築く必要があると改めて感じた。今後も教師集団としてのさらなる資質向上を目指し、よりよい援助を探りたい。



## センター公開講演会報告

## 第1回公開講演会「いじめ撲滅の映画作りの実践-変わっていく生徒たち」

平成20年10月12日（日）12時から415教室において、本年度の第1回講演会が開催されました。昨年度に引き続き、藤範登志美氏（和歌山市立城東中学校教諭）を講師としてお迎えし、本年度は「いじめ撲滅の映画作りの実践-変わっていく生徒たち」と題した講演と自主制作映画“No!! Bullying”上映を行いました。なおこの企画は第7回「未来からの留学生」と共催という形で行いました。

昨年度の講演では、不登校生徒に取り組んだ藤範先生の実践を取り上げましたが、不登校の問題といじめの問題は深く関わり合っていることが多いことから、本年度は、いじめ問題に取り組んだ実践についての講演を企画しました。

藤範先生は映画づくりを通して、いじめる側、いじめられる側、傍観する立場、教師の立場などの役割を生徒に演じさせることにより、いじめの悲惨さを身をもつて体験させるという実践を行いました。

講演の内容は、公立中学校のある学級で女子生徒が、自身の何気ない言動からいじめられるようになったという以前に実際にあった事例をもとに、生徒達が文化部発表会における上映のために自主制作した映画“No!! Bullying”を鑑賞し、当事者だった生徒や、役を演じた生徒、映画を鑑賞した保護者の声を紹介しながら、これまで藤範先生が取り組んだいじめ問題について具体的にお話し下さるものでした。

いじめを受けたことにより児童生徒が自らその命を絶つという痛ましい事件が依然として発生しています。このような事態を受けて、平成18年には文部科学大臣が「未来ある君たちへ」と題した「お願い」を発表しています。いじめ問題は教育実践の場において、最も難しい、しかし避けて通ることは決して許されない問題の一つであるといえるでしょう。

文部科学省（2006）は「学校におけるいじめ問題に関する基本的認識と取組のポイント」の中で「いじめを行った児童生徒に対しては、（中略）いじめの非人間性やいじめが他者の人権を侵す行為であることに気付かせ、他人の痛みを理解できるようにする指導を根気強く継続して行うこと」と通知を行っています。しかし、どのようにすれば「いじめられる側の痛みをわかる」子どもが育つのでしょうか。

藤範先生の実践を通して、生徒たちの意識は確実に変容していったということは、講演でお話しされた次のような実践の様子からもうかがうことができました。

「映画の撮影中、いじめる役の生徒たちは『気持ちがいらいら』とナーバスになったり、いじめられる役の生徒も『いじめってこんな残酷なものなんか』と口走ったりと、次第に役に感情移入していった。いじめの中心となる役を演じた生徒には、役の通りいわゆる優等生であり、その自分を保つことができずに不登校になりかけていた。が、思い切っていじめ役にした。幸い本人もやる気があり、この映画制作がきっかけとなり、ほぼ毎日学校に登校できるようになり志望校に合格した。この映画の出演がなければ、いまごろどうなっていたか…という言葉を保護者からいただいた。」

本講演は、いじめの問題に取り組まれている多くの先生に、何らかの示唆を与えてくれる内容であったといえるでしょう。（文責：岡田 知也）

## 第2回公開講演会「生徒指導の今日的課題にどう取り組むか

～いじめ、不登校、非行問題等に苦慮する現場へのメッセージ～

講師：大阪樟蔭女子大学長  
国立教育政策研究所生徒指導研究センター総括研究官  
鳴門教育大学大学院学校教育研究科准教授

森田洋司先生  
三好仁司先生  
阪根健二先生



平成20年12月13日(土)に公開講演会「生徒指導の今日的課題にどう取り組むか」が開催された。公立学校教員(幼稚園、小学校、中学校、高等学校)、教育委員会関係者、大学教員、院生、学生等118名の方に参加していただいた。附属教育実践総合センター長によるあいさつの後、いじめ、不登校などの研究で著名な森田洋司先生、国立教育政策研究所(文部科学省生徒指導担当調査官)の三好仁司先生、より現場に近い視点から鳴門教育大学の阪根健二先生の三者による鼎談が行われた。

三好先生からは、携帯メール等による問題が増加している今日的な生徒指導上の課題を中心に、どのような点に配慮して指導・対応したらよいかについて話があった。

森田先生からは、三好先生の行政としての視点に加えて、では現場としてどうそれらに対応したらよいか、またそのときの対応の視点として重要なことは何かということを中心に話があった。加えて、プライベート化の理論をもとに、「私」の視点から、「公」の視点に立って考えることの重要性についての指摘があった。

阪根先生からは、二人の先生の話を受け、現場の教員として、これからどのようにすればよいか具体例を示しながら話された。

今回の講演会は、研究、行政、現場の三者のコラボレーションにより協働して生徒指導に取り組むことの重要性を再認識させられ、参会者にとって今後の実践研究におおいに役立つものとなったと考える。  
(文責：七條 正典)

### 第3回公開講演会

「学習指導要領における教育内容に関する主な改善事項にどう取り組むか  
～言語活動の充実、理数教育の充実、小学校における外国語活動を中心に～」

講師：群馬大学教育学部教授  
奈良教育大学教職大学院教授  
金沢大学人間社会学域・学校教育学類教授

河野庸介先生  
吉田明史先生  
加納幹雄先生

平成21年2月14日(土)公開講演会「学習指導要領における教育内容に関する主な改善事項にどう取り組むか」が開催された。公立学校教員(幼稚園、小学校、中学校、高等学校)、教育委員会関係者、大学教員、院生、学生等57名の方に参加していただいた。附属教育実践総合センター長によるあいさつの後、群馬大学の河野庸介先生、奈良教育大学の吉田明史先生、金沢大学の加納幹雄先生によるシンポジウムが行われた。

まず、来年度からの学習指導要領の移行を控え、言語活動の充実、理数教育の充実、小学校における外国語活動など特に関心のある重点課題について、それぞれの専門分野の3名の先生方から、その重点の指導のポイントが話された。次に、今回の改訂では、すべての教科等において、その取り扱いの箇所でも言語活動の重視が明記されていることから、それぞれの重点課題について言語活動の充実という視点から話がなされた。なぜ今、言語活動の重視が求められているのか、各教科、あるいは小学校における外国語活動、また、その根幹である国語科における指導の在り方の改善にも触れながら、わかりやすく話していただいた。

その後、参加者からの質疑を受け、さらに現場の視点から特に留意すべき点について話し合われた。

最後に、言語活動、理数教育、外国語活動それぞれの実践に向け、講師から元気の出るメッセージが参会者に伝えられた。

参会者からは、一人の講師だけでなく、複数の視点から言語活動の重視に関してお話が聞け、他の教科の在り方も考えることができ、明日からの実践につながる有益な会であったとの評価を多数いただいた。  
(文責：七條 正典)

## 平成20年度 教育実践総合センター研究会報告

## 第1回 教科の魅力で授業を成立させる

日 時 : 平成20年11月27日(木) 16:30~18:30

話題提供 : 伊藤裕康先生(社会科教育)

授業力の向上や教師の実践的指導力の育成は、今や日常的に聞かれています。授業を構想し、実践していく力が強く求められています。

第1回のセンター研究会では、本センター企画推進委員でもあり、附属学校において社会科教育実践を行っている伊藤裕康先生から話題を提供いただきました。先生の実践したESD「飛び込み授業」1時間を、参加者がストップモーション方式で視聴し、意見交流を通して、授業を成立させる条件としての「教科の魅力とは何か」「教材分析の在り方」等やESDそのものについても深めました。

ESDは、人類が挑戦すべき今後の重要課題を主要な学習課題とするものであり、子どもが傍観者のではなく、自己の課題として探求する当事者性を育む授業が求められていきます。ESDの視点は、次回の学習指導要領改訂では、より積極的に入ってくるのでは、という指摘がありました。今後、こうした視点も念頭に置きつつ、授業に関わる問題を考えていく必要があると思われまます。

## 第2回 赤ちゃん学ア・ラ・カルトー乳幼児期の保育・子育てと関連づけながら一

日 時 : 平成21年3月4日(水) 16:30~18:30

話題提供 : 川田学先生(幼児教育)

乳幼児期の教育・保育について、これまで様々な議論が行われてきました。早期教育の是非が問われ、幼小連携の在り方が議論され、そして現在、幼稚園教育要領の改訂、認定こども園の普及促進、基本的生活習慣の育成など、内容から制度まで、多岐にわたる改革と議論が進められています。こうした潮流の中で、今日の乳幼児の実態や乳幼児教育・保育の現状を的確に把握し、それらを踏まえて、今後の乳幼児教育・保育の在り方を見通していくことが重要になります。

第2回のセンター研究会では、本センター教育実践総合研究編集会議委員でもある川田学先生から話題を提供いただきました。最近の保育所や幼稚園、家庭教育、子育て支援の中から聞こえてくる諸々の事柄と、先生が取り組まれている乳幼児の研究について、映像も交えながらお話しいただきました。それらを通して、これからの乳幼児教育・保育の在り方等について深めました。

都会と地方での乳幼児教育・保育の異なりを、環境の視点からお話しいただきました。また、コンゴのエフェ族に見られる乳児の発達課題、アフリカのサン族におけるスリングを通した母子密着の子育て、日本で昭和40年頃まであった「えじこ」を紹介いただき、乳幼児教育・保育のシステマ的な側面について問題提起をいただきました。0~3歳児教育・保育は重要であり、今後それを可能とする子育てシステムの構築が求められるという提起がなされました。

(文責:山岸 知幸)

## フレンドシップ事業報告

平成20年度「教育実践基礎演習（フレンドシップ事業）」は、34名の受講生の参加を得て行われました。本事業は、学校教育の場である学校から離れた野外において、子どもたちとふれあう様々な活動体験を通して、子どもの気持ちや行動を理解し、教育実践のための実践的指導力の基礎を身につけることを目的としています。

本年度は、5月7日に、香川県教育委員会 主任社会教育主事 田嶋 康先生、香川県屋島少年自然の家 所長 長谷川誠二先生、附属坂出小学校・附属高松小学校の先生方にお越しいただき、「生涯学習社会における野外教育の意義」や「野外体験への参加に際しての諸注意」などについて、事前研修を実施しました。続いて、子どもたちとともに行う自然体験活動前の技能研修として、6月7日(土)～8日(日)に香川県立五色台少年自然センターにて開催された「野外教育体験活動 指導者講習会」に参加しました。講習会では、救急対処法や野外活動実習、キャンプファイヤーの運営と実施、飯ごう炊さんの方法などについての講習を受けました。



本年度は各施設での活動日程の都合上、実施日程が前後せざるを得ない状況となりましたが、受講生はこの後2グループに分かれ、6月5日(木)～6日(金)の附属坂出小学校 集団宿泊学習(於:屋島少年自然の家)と、7月16日(水)～18日(金)の附属高松小学校 集団宿泊学習(於:国立大洲青少年交流の家)に参加し、子どもたちと自然体験活動を行うとともに、活動支援の一端を体験しました。

これらの活動の総括として、7月30日(水)午後、学生の運営によって「野外教育体験シンポジウム」を開催しました。野外教育体験における諸活動をもとに、小グループごとに意見交流を行い、グループ討議の成果を発表しました。続いて、学生の発表内容などをふまえ、5月にもお越しいただいた田嶋先生をはじめ、五色台少年自然センター 次長 佐々木 茂先生、附属坂出小学校 小西 寛先生・附属高松小学校 吉原功雄先生によるシンポジウムを行いました。

本年度受講した学生からは、「よかった…夢がかたまった。子どもの成長を間近で見れて感動し、教師のやりがいを見つけることができた」「大学2年生という早い段階で実際に小学生や小学校の先生と深く関わることができ、将来の自分の夢について真剣に考え直すよい機会になった」などの意見が寄せられました。本演習が学生たちにとって、教師の仕事に対する使命感や誇り、子どもに対する愛情や責任感など、教職に対する強い情熱の基礎を形成する契機となっているようです。



(文責:松下 幸司)

第73回国立大学教育実践研究関連センター協議会に参加して

平成20年10月10日（金）に、第73回国立大学教育実践研究関連センター協議会が信州大学において開催された。国立大学教育実践研究関連センター協議会会長・菌屋高志先生による開会のあいさつ、信州大学教育学部長・岩永恭雄先生の主催校のあいさつの後、平野朝久副会長の司会により、総会が行われた（9:30～10:30）。

議事録の確認修正、橋本創一幹事の選出、平成19年度会計収支報告及び監査報告、現代GP「教員養成のためのモジュール型コア教材開発」についての状況報告及び利用促進の依頼、APEIDの報告、ICT活用教育支援協議会の報告等がなされた。

その後、東原義訓副会長の司会により、「民間企業の人材開発の観点から教育界に期待したいこと」という演題で、セイコーエプソン（株）研究開発本部開発戦略室の奥石美和子氏による講演が行われた（10:40～12:00）。民間企業における人材育成の視点は、教員養成においてもつながるものが大であり、その具体的な取り組み等大変興味深いものであった。

午後からは、中野明德副会長の司会により全体会が行われた（13:30～15:50）。その内容の第一は、現代GP「教員養成のためのモジュール型コア教材開発」に関して、全体の利用と利用登録（新藤茂幹事）、臨床編（中野明德副会長）、実践編（益子典文幹事）、ICT活用編（新藤茂幹事）、マルチインデックスについて（加藤直樹幹事）、利用評価の依頼（新藤茂幹事）等についてお願い及び報告があり、協議が行われた。

第二は、教員免許更新講習と教職実践演習の円滑な実施に向けての各大学の動向とセンターの役割に関して、鳥取大学の小林勝年先生、及び東京学芸、富山、和歌山、弘前、秋田の各大学から話題提供があり、それをもとに協議が行われた。

閉会の後、各部門に分かれて、部門研究会が行われた（16:00～18:00）。

教員養成の在り方とセンターのこれからの役割について、今一度考える機会が与えられ、センターの将来構想について検討する必要性を強く感じた。（文責：七條 正典）

第74回国立大学教育実践研究関連センター協議会に参加して

平成21年2月20日（金）に、第74回国立大学教育実践研究関連センター協議会が東京学芸大学において開催された。今回は、午前中に現代GP「教員養成のためのモジュール型コア教材開発」フォーラムが開催され、午後からは総会及び部門会議が行われた。

フォーラムでは、2年間にわたる研究の成果が発表された。各グループが作成した教材が示され、各大学での教員養成や研修等において、積極的に活用して欲しいとのことであった。

総会では、まず、菌屋高志先生（会長）による開会のあいさつの後、来賓の堀清一郎氏（文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室長）のあいさつ、主催校からのあいさつがあった。議事としては、会長について、監査について、会費についてであった。平成21年度の会長として、菌屋先生が再任されることになった。報告としては、ICT活用教育支援協議会報告、議事録（第73回）、部門報告、新幹事委嘱について報告があった。その後平成20年度の会計中間報告が行われた。休憩をはさみ、各センターの状況説明と意見交換が行われた。また、今年度で終了するSCSを、なんらかの形で残していきたいとの提案がなされ、その可能性を探ることになった。閉会では、次回第75回大会は筑波大学で開催されることが報告された。

部門会議では、従来の3部門を試行的に2部門とする提案がなされた。従来の＜教育実践・教師教育部門＞と＜教育工学・情報教育部門＞に専門性が重なる先生方が多く、研究の活性化のためにも、協働して進めていくことが確認された。

今回の協議会に参加して、センター組織の再編やスタッフの移動の話が多く聞かれた。特任教員が増えつつあり、教職大学院へ移動した先生方もあるとのことであった。また、「教職実践演習」への対応から、学部全体の問題にセンターがどのように関わっていくかということが話題となっていた。現在、大学・学部におけるセンターの在り方が、大きく問われている状況にあることを実感した。（文責：山岸 知幸）

## 教育実践集中講座実践報告

附属教育実践総合センター客員教授 安藤 紳一

教師を目指す学生たちが、「教師は夢を与える仕事であり、未来を切り拓いていく仕事である」ことを実感できるよう、そして教師への憧れが膨らむようお願いつつ、香川県教育会館好井貞夫館長(高松市立栗林小学校前校長)とともに、本講座を担当させていただいた。

**第1回 未来への道標 ～本気で「教師」を目指す人のために～**

教員採用試験を目前に控えての講義であり、真剣な眼差しで受講する姿は、まさに本気で教師を目指す態度の表れでもあった。「学校力と危機管理」「教師力と説明責任」「人間力と改善」をテーマに学校運営の視点から教育をとらえるとともに、「体罰・懲戒、出席停止」「いじめ・不登校問題への対応」など生徒指導上の問題から、児童生徒への対応について考えた。若かりし日々の思い出、“バナナ事件”“シューマイ事件”が好評だった。

**第2回 未来予想図—2008秋— ～教師ってこんなにおもしろい!～**

「総合的学習論」「生徒指導論」「道徳教育論」の講義を活用して、学校現場における実際の指導の在り方について考えた。また、「教育実習事後指導」では、実際に教師を経験した後であることから、自分自身の問題として、そして未来の自分を思い浮かべながら、子どもたちと共に学ぶことの大切さを実感する学生の姿に感心した。

- ◆ 先生のお話を聞いて、やはり教師になりたいと強く思いました。子どもとのかかわりや事件、うまくいかなかったことの一つ一つが、信頼関係を結んだり、子どもとつながるきっかけになっているなど感じました。子どもを見るとは、ただ「見る」だけではなく、子どもを理解し、把握することであるということが一番心に響きました。
- ◆ 教育実習で道徳の授業を行ったが、子どもたちに本当に伝わったのかと疑問に思うこともあった。実際の出来事や体験を取り入れた授業を展開することで、子どもの頭ではなく、心に伝わっていくことができるのだと思った。私も子どもが学びたいと思えるような授業づくりをやっていきたい。
- ◆ 私も今、悩んでいることがあるが、そんな悩みがちっぽけなものに思えだし、今まで「やってみよう」と思い、自ら挑戦することがほとんどなかったことに気付かされた。今生きていること、自分のそばにはたくさんの方がいてくれること、「悩める」ことが「幸せ」だということがわかった。そして、言われてするのではなく、自分からやってみようと思えた。私は今、選択肢があり、どちらを選んだらよいのかわからずに迷っている。でも、どちらを選んでも「自分で決めたことだから、きっと後悔はしない」と、今は胸を張って言える。

**第3回 未来三部作・完結編 ～未来の「教師」を目指す貴方に送るラストメッセージ**

好井先生は、子どもたちの活躍の様子をまとめたDVDを見せ、「子どもの挑戦・感喜・夢路を活かす学校」を紹介した。私は、「数学サプリ」として、数学教師を目指すきっかけとなった問題を出題し、数学の楽しさ、おもしろさを伝えるとともに、「ハニカミライブ」では、教室から生まれた思い出の歌を、ギターの弾き語りで披露した。

すべての講義に発見があり、感動があった。香川大学の学生のすばらしさを改めて実感することができた。近い未来に、同じ“仲間”として出会えることを楽しみにしている。

**【センター活動報告 (08/08~09/03)】**

9月9日(火)	第六回専任会議
9月24日(水)	第三回フレンドシップ実施専門委員会
10月10日(金)	第73回 国立大学教育実践研究関連センター協議会
10月12日(日)	第一回公開講演会
10月14日(火)	第七回専任会議
10月20日(月)	教育実践集中講座(第二回1回目)
10月30日(木)	教育実践集中講座(第二回2回目)
11月6日(木)	教育実践集中講座(第二回3回目)
11月19日(水)	教育実践集中講座(第二回4回目)
11月25日(火)	第八回専任会議
11月27日(木)	第一回センター研究会
12月4日(木)	第三回授業づくり・授業改善に向けた教師の「評価力」の向上に関する研究プロジェクト
12月8日(月)	教育実践集中講座(第二回5回目)
12月9日(火)	第九回専任会議
12月12日(金)	第三回編集会議
12月13日(土)	第二回公開講演会(鼎談)
12月15日(月)	教育実践集中講座(第二回6回目)
1月7日(水)	第四回編集会議
1月26日(月)	教育実践集中講座(第三回1回目)
1月27日(火)	第十回専任会議
1月31日(土)	教育実践集中講座(第三回2回目)
2月14日(土)	第三回公開講演会(シンポジウム)
2月20日(金)	第74回 国立大学教育実践研究関連センター協議会
2月24日(火)	第十一回専任会議
2月26日(木)	第四回授業づくり・授業改善に向けた教師の「評価力」の向上に関する研究プロジェクト
2月27日(金)	第九回学部・附属学校園教員合同研究集会
3月4日(水)	第二回センター研究会
3月5日(木)	第二回管理委員会
3月18日(水)	第二回企画推進委員会
3月24日(火)	第十二回専任会議

**【センターからのお知らせ】**

**教科書(小・中学校)の閲覧について**

公立小・中学校の教科書・指導書を全教科そろえております。先生方には、関係の学生に周知していただき、活用していただきたいと思っております。なお、貸出はおこなっておりませんので、センター事務室で閲覧していただくことになります。

**貸出物品について**

以下の器材を貸し出しております。貸出数に限りがありますので、ご利用希望の方は、早めにセンター事務室までお申し込みください。

- ・プロジェクター(スクリーン付)
- ・デジタルビデオカメラ(三脚、バッテリー)
- ・デジタルカメラ
- ・ICレコーダー
- ・ノートパソコン

**平成21年度 研究プロジェクトについて**

平成21年度より、新しい研究プロジェクトが開始される予定です。平成21年度の事業計画が確定次第、お知らせいたします。多くの先生方のご参加をお待ちしております。

## 寄贈図書(08/08~09/03)

- カリキュラム研究 第17号 日本カリキュラム学会  
新潟市教育委員会と教育人間科学部の連携による「12年経験者研修」プログラム・教材開発研究  
新潟大学教育人間科学部現職教員研修計画委員会  
新潟市12年経験者研修教科指導研修用テキスト(改訂版)
- 新潟大学教育人間科学部「12年経験者研修」プロジェクトチーム  
平成19年度新潟大学教育人間科学部「フレンドシップ事業」1年次教育実習カリキュラム開発  
研究(第9年次)報告書 新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター  
平成19年度新潟大学教育人間科学部「フレンドシップ事業」報告書 社会教育施設・団体と連  
携する「体験的カリキュラム」の開発研究-第11年次研究-
- 新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター  
平成19年度新潟大学教育人間科学部「フレンドシップ事業」報告書 4年次生を対象とする教  
育実習カリキュラムの開発研究「研究教育実習」の多様な展開(IV)
- 新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター  
平成19年度新潟大学教育人間科学部「フレンドシップ事業」報告書 新潟市教育委員会との連  
携による「学習支援ボランティア」派遣事業の実施(第5年次)
- 新潟大学教育人間科学部「フレンドシップ事業」第3回キャリア教育研究会実施  
報告書 新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター  
鳥取大学生涯教育総合センター研究紀要 第4号 鳥取大学生涯教育総合センター  
和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 No.18
- 和歌山大学教育学部附属教育実践総合センター  
ルーテル学院大学臨床心理相談センター紀要 Vol.1
- ルーテル学院大学附属臨床心理相談センター  
宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 第31号
- 宇都宮大学教育学部附属教育実践総合センター  
メディア教育研究 2008Vol.5 No.1 メディア教育開発センター  
国立特別支援教育総合研究所研究紀要 第35巻 国立特別支援教育総合研究所  
学校教育研究 第19巻、第20巻 兵庫教育大学学校教育研究センター  
学校におけるコミュニケーション能力の向上に関する総合的研究
- 兵庫教育大学学校教育研究センター  
岐阜大学カリキュラム開発研究 Vol.24 No.1 岐阜大学総合情報メディアセンター  
岐阜大学カリキュラム開発研究 Vol.25 No.1 岐阜大学総合情報メディアセンター  
岐阜大学カリキュラム開発研究 Vol.25 No.2 岐阜大学総合情報メディアセンター  
2008年度横浜国立大学教育相談・支援総合センター研究論集 第8号
- 横浜国立大学大学院教育学研究科教育相談・支援総合センター  
教育実践研究 第34号 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター  
富山大学スクラムプランナー学校バリアフリーへの挑戦2007
- 富山大学人間発達科学部・附属学校園  
立正大学臨床心理学研究 第6号 立正大学心理臨床センター  
秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要 第29号、第30号
- 秋田大学教育文化学部附属教育実践総合センター  
島根大学教育臨床総合研究 2008 Vol.07 島根大学教育学部附属教育支援センター  
札幌学院大学心理臨床センター紀要 第8号 札幌学院大学心理臨床センター  
甲子園大学発達・臨床心理センター紀要 第3号 甲子園大学発達・臨床心理センター  
生徒指導研究 第19号 兵庫教育大学大学院心の教育実践コース  
国立特別支援教育総合研究所 英文紀要第9巻(NISE Bulletin Vol.9)
- 国立特別支援教育総合研究所  
メディア教育研究 Vol.5 No.2 メディア教育開発センター  
IMETS No.166、No.167 (財)才能開発教育研究財団  
福井大学教育実践総合研究 第33号 福井大学教育地域科学部附属教育実践総合センター  
国際シンポジウム「高等教育における効果的eラーニング実施のための長期的戦略ビジョン」の  
報告書 メディア教育開発センター  
教育実践総合研究 No.9 信州大学教育学部附属教育実践総合センター  
広島文教女子大学心理教育相談センター年報 第16号
- 広島文教女子大学心理教育相談センター  
教育実践総合センター研究紀要 第26号 山口大学教育学部附属教育実践総合センター  
教育実践研究 第3号 富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター  
鳴門教育大学学校教育研究紀要 No.23 鳴門教育大学地域連携センター

教育実践総合研究第19号原稿募集

『香川大学教育実践総合研究』第19号は、5月29日（金）原稿受付締切です。以下の投稿要領をご参照の上、奮ってご投稿ください。

香川大学教育実践総合研究投稿要領

1（投稿の要領）

香川大学教育実践総合研究（以下「教育実践総合研究」という。）への投稿については、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、この要領の定めるところによる。

2（投稿の内容）

教育実践総合研究は、教科教育、教育臨床など広く教育実践に関する独創的な研究論文・実践報告、資料（研究ノート、研究動向の紹介など）及び香川大学教育学部附属教育実践総合センターの活動報告などを掲載する。

3（投稿者）

教育実践総合研究に投稿できる者は、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、香川大学教育実践総合研究編集会議（以下、「会議」という。）が特に依頼した者とする。

4（投稿原稿の提出方法）

投稿原稿は、完成原稿とし、原則としてワープロで作成し、ワープロ打ち出し原稿2部と、原稿を保存したフロッピーディスク等を会議に提出する。

5（投稿原稿の長さ）

投稿原稿の長さは、刷り上がり14頁（1頁は21字×42行×2段）以内を原則とし、偶数頁になることが望ましい。超過する場合は、会議の議を経て認めることがある。

6（刷り上がり1頁目の形式）

刷り上がり1頁目は、和・英文のタイトル・著者名・所属（所在地）、和文要旨（200字）及びキーワード（5語）を含むものとする。

7（投稿原稿の取り扱い）

投稿された論文等は査読を行い、会議においてその取り扱いを次のいずれかに決定する。査読者については、会議において決定する。

（1）採録 （2）条件つき採録 （3）返戻

8（校正）

校正は原則として3校までとし、投稿者において速やかに行うものとする。その際、印刷上の誤り以外の訂正、挿入、削除は原則として認めない。

附則

本要領は、平成元年5月17日から施行し、平成元年4月1日から適用する。

附則

本要領は、平成12年3月6日から施行し、平成11年4月1日から適用する。

附則

本要領は、平成17年12月14日から施行し、平成17年11月9日から適用する。

附則

本要領は、平成19年4月1日から施行する。

---

香川大学教育学部附属教育実践総合センターニュース

No. 29

発行日：平成21年3月31日

編集発行：香川大学教育学部附属教育実践総合センター 代表者 西原 浩

URL <http://edu-center.ed.kagawa-u.ac.jp/~j-cen/> E-mail : [jcen@ed.kagawa-u.ac.jp](mailto:jcen@ed.kagawa-u.ac.jp)

[ 〒760-8522 高松市幸町1-1 Tel. 087-832-1683 Fax. 087-832-1689 ]

---